

2012年(平成24年)3月26日

病院長からの一言 ～退任にあたって～



弘前大学医学部
附属病院長 花田 勝美



写真2 附属病院正面外観

3月末日をもって任期満了のため附属病院長を退任することとなりました。就任以来6年間の長きにわたりご支援いただいた全病院職員、市民を代表して附属病院を支えていただいた病院ボランティアの皆様衷心より感謝申し上げます。

広域な医療圏の最後の砦として、また、高度な医療の提供の場として施設の再開発に職員一丸となって努力してまいりました。それも、昨年12月末に外来診療棟と医学部臨床研究棟を結ぶ渡り廊下(写真1)が完成したことで附属病院の再開発事業はとりあえず終了となります。再開発23年の間に、第一病棟、第二病棟、中央

診療棟、緊急被ばく医療を担う高度救命救急センターの竣工を始め、外来診療棟屋上ヘリポート、国立大学病院では初めての地下駐車場を有する病院前の環境整備等が行われました。今や、設備、外観ともに全国に誇れる大学病院となりました(写真2)。

病院運営に関しては必ずしも平坦な道ではなかった折に、遠藤正彦前弘前大学長、佐藤敬前医学研究科長(現学長)のリーダーシップ、法人本部のご支援に感謝しております。今後は新病院長のもとで附属病院が更なる発展を遂げられますことを祈っております。

新任科長の自己紹介 ～形成外科科長に就任して～

形成外科科長 漆館 聡志



平成24年1月1日付けで弘前大学医学部附属病院形成外科を担当することとなりました漆館聡志です。どうぞよろしくお願い致します。

私は青森県三戸町の生まれで、弘前大学を平成7年に卒業しました。大学ではラグビー部に所属していました。

私と形成外科との出会いは医学部5年生の時です。高校時代の柔道で耳が変形していた私は、臨床実習で使用する聴診器が耳に入りませんでした。そこでラグビー部の先輩であった形成外科の四ッ柳先生を訪ね、聴診器が入るように耳介形成術を施行していただいたのです。これが私と形成外科との出会いです。その後臨床実習で形成外科をまわりその魅力に取り付けられました。創る外科は私にとって衝撃的でした。

かくして私は形成外科医の道を選択しました。形成外科は特定の臓器が対象ではなく頭のとっぺんからつま先まで体表面がすべて対象となるため、非常に様々な疾患が存在します。また治療法も多種多様で非常にバラエティに富んでおり、形成外科手術は定型的な術式が少ないのが特徴です。このた

め症例ごとに術式を計画していく必要がありますし、術中に臨機応変に変更していくことも必要です。この点が形成外科の難しい点ではありますが、逆に醍醐味でもあります。私は顔面組織欠損に対する局所皮弁による顔面再建をライフワークの1つとしておりますが、このような治療が成功し、顔面再建後の患者さんがマスクなどを付けずに外来を受診したときには非常にうれしく感じます。今後このような質の高い医療の提供に努めたいと思います。

最後になります。形成外科は関連各科、コメディカルスタッフのご協力あっての形成外科と考えております。これまで以上に各方面との連携を強化していきたいと考えており、依頼があればフットワーク軽く対応させていただきたいと思っておりますのでお気軽に御相談いただければ幸いです。それでは今後ともご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

新任部長の自己紹介

～検査部長並びに感染制御センター長に就任して～

検査部長 感染制御センター長 萱場 広之



昨年11月に臨床検査医学講座教授に就任した萱場広之です。仙台市出身で秋田で医学を学びました。他県への赴任や海外留学などの期間を除けば、およそ30年にわたって秋田で暮らしました。弘前の冬は雪が多少あるものの、風が静かで穏やかなように感じています。講座のほかに病院では検査部と感染制御センターの仕事を仰せつかっております。前教授の保嶋実先生はじめ、歴代の教授が築いてこられた職場であり、その歴史を背中に感じながら、新しい時代に臨もうと思っております。

この国全体が右肩上がりから人口減少時代に入り、社会的にも様々な改革が起こりつつある今、我々がどのような仕組みを創成し、

高度な医療サービスと教育、そして研究を維持していけるのか、常に創意と工夫が求められています。アンテナをはり、内外の人とつながりながら乗り越えていければと願っています。臨床検査医学は扱う領域が広く、学生教育も広範囲を網羅します。医学科学生系統講義では検査医学と臨床の基本的部分を大切にしながら、実践的知識を重視していきたいと思っております。また、本学保健学科では検査技師を目指す若人が多く学んでおります。検査技師自身も学生教育に携わることで知識を新たにし、知識、精神的に磨かれている様子が伝わってきます。検査技師スタッフからは社会人大学院制度を利用して、研究者としての資質を磨こう

とする者も少なくなく、教育研究施設である本院ならではのスタッフの質の高さに感銘を受けております。優秀なスタッフに応えるだけの職場、研究・教育の場を提供していかなければなりません。大学病院が検査技師のキャリアアップを図る仕組みとカリキュラムを提案し、県内外の意欲あふれる検査技師・学生に応えることができるよう願っています。

診療面、研究面とも皆様のご指導、ご協力を頂きますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。

先憂後楽

新病院長に期待すること



副院長 福田 眞作

なければ、さらなる増収が期待できたはず。また、この制度の導入以降、院内待機制度を廃止する診療科が急増し、夜間・休日の院内救急コール制度が破綻しつつあるとの声も聞かれます(第63号南塘だより、先憂後楽)。裁量労働制導入の原因となった問題についてはまだ決着をみておりませんが、入院患者さんの医療安全が損なわれるようなことは絶対にあってはならないことです。

弘前大学医学部附属病院の次期病院長に藤哲教授が選出されまし

た。藤次期病院長は、病院長選考時の「抱負等」のなかで、「動きやすい環境を提供するのが、病院長の最大の役目」と述べています。もちろん、待遇改善についての法人本部との交渉は難航必至と思われませんが、病院の現状を理解いただいている佐藤敬学長のご支援をいただき、(素晴らしいメス裁き同様に)その突破口を切り開いていただけるものと期待しています。

花田勝美病院長のもと、附属病院の再開発事業が極めて順調に実行され、外来診療棟、高度救命救急センターさらに地下駐車場の整備によって、病院の外観が一変したことは皆さんもご存じの通りです。また、ダ・ヴィンチなどの高額医療機器の導入によって、附属病院は日本のトップレベルの高度医療技術を提供できる医療機関として発展し続けています。これは、ひとえに病院経営陣ならびに事務方のご尽力によるものですが、現場で働く医療スタッフに充

実感や達成感がいまひとつ感じられないのは何故でしょうか? 高度先進医療の実践、患者本位の医療に向けた様々な取り組みが行われる一方で、その担い手である医療スタッフ(医師に限らず)の待遇改善についての取り組みが十分だったとはいえません。皆さんもご存じの裁量労働制と同時に導入された新初任給調整手当制度は、医師の働く意欲、病院経営向上に対する意欲を明らかに低下させました。今年度も黒字決算が見込まれていますが、この制度の導入が

外来診療棟の渡り廊下完成

弘前大学医学部附属病院では、医学部臨床研究棟と附属病院外来診療棟正面西側を結ぶ待望の「外来診療棟渡り廊下」が完成し、平成23年12月27日に外来診療棟渡り初め式が行われました。

式では、花田勝美病院長の挨拶、遠藤正彦前弘前大学長からお言葉をいただき、続いてテープカットにより渡り廊下完成を祝い、関係者による渡り初めが行われました。

工事は、平成23年9月2日に着工し平成23年12月26日に完成。廊下本体の全長は32.99メートル、幅3.00メートルで、床面は防滑性ビニル床シートで凹凸が少なくつまずきにくくなっており、自動点灯及び消灯のLED照明を採用し省エネにも配慮しています。また、外来診療棟正面玄関付近から渡り廊下入口までの歩道には、ロードヒーティングを増設し、渡り廊下入口ポーチには融雪マットを新設することで、冬季にも利用しやすいものとなっています。

ます。外観も既存外来診療棟や中央診療棟などの周囲の外壁色に合わせた色合いとし、内観については、茶・ベージュ系を基調に、暖かみと落ち着きのある色合いとなっています。

なお、患者さんやご家族の方が誤って通行しないよう自動ドアには、電気錠と非接触式のカードリーダーを設置し、ICカード認証によるセキュリティ対策を行っています。



テープカットをする遠藤弘前大学長等(右から花田病院長、佐藤前医学研究科長(現学長)、遠藤前弘前大学長、江羅総務担当理事、對馬保健学研究科長)

各診療科の紹介

弘前大学医学部附属病院はがん診療対策の一環として平成18年11月に、外来化学療法室や緩和ケアチームを中心とした腫瘍センターを設置致しました。平成19年1月に地域がん診療連携拠点病院としての認定を受けたことを契機に内容の充実を進め、平成20年に12月には改組し、拠点病院としての機能を担うために、がん化学療法室、がん放射線治療診療室、緩和ケア診療室、院内がん登録室、がん診療相談支援室の5部門から構成されるセンターとなりました。

がん診療は、診断・治療・緩和と実に多岐に渡っています。腫瘍センターには、治療部門として、放射線治療を行う放射線治療診療室と外来通院でがん薬物療法を行うためのがん化学療法室があります。放射線治療では平成23年に最新の放射線治療機器が2台整備され高精度放射線治療など最高水準の放射線治療が受けられる診療体制となっております。がん化学療法室では、各診療科に通院中の方々が利用します。緩和ケア診療室では、がんに伴う痛みを含めた緩和治療を入院および外来の患



外来化学療法室(がん化学療法室)



放射線治療部門メンバーとリニアック

【腫瘍センター】



がんサロン



がん登録室



緩和ケアチーム

の窓口にもなっております。腫瘍センターでは、幅広いがん診療を行うばかりでなく、先進医療や難治癌に対する診療も展開しています。これらの業務を通して、青森県におけるがん診療の成績向上を目指しています。

腫瘍センター長(放射線科学講座教授) 高井良尊

平成23年度 弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第14回附属病院診療奨励賞授賞式が、医学部学術賞及び医学部医学科国際化教育奨励賞授賞式と共に、平成24年1月27日に医学部コミュニケーションセンターにおいて執り行われました。授賞式では、受賞者に花田病院長から本賞の盾及び副賞として財団法人弘仁会から奨学寄附金が贈呈されました。今年度は、診療技術賞として病理部(代表刀稱龜代志外6名)の「ベッドサイド細胞診導入による細胞診断の精度向上と患者負担の軽減」、神経科精神科(代表菊地隆外1名)の「臨床応用を目的と

した「てんかん責任遺伝子診断用DNAチップ」と心のふれあい賞として第1病棟3階(代表松田和子外36名)の「小児科病棟における成長・発達を促すあそび場の提供」が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内にて和やかに行われました。



臨床応用を目的とした「てんかん責任遺伝子診断用DNAチップ」 神経精神医学講座 菊地 隆、菅原貴征

○診療技術賞を受賞して
代表 神経精神医学講座 菊地 隆
この度は附属病院診療奨励賞診療技術賞を受賞させていただき、誠にありがとうございました。グループを代表いたしまして、関係者の方々に心よりお礼申し上げます。
てんかん治療の主役は、抗てんかん薬ですが、これには多くの種類があります。現在、どの薬がどのようなてんかん発作に有効なのかということはある程度分かっているのですが、実際に患者さんを治療する際には、なかなか理屈どおりにはいかず、試行錯誤で薬物投与を繰り返す、患者さんにあった薬を見出す必要があります。しかし、このように何種類もの薬を試すのは、患者さんの体に負担をかけることにもなりますので、できるだけ迅速に患者さんにあった薬を見つけることがとても大切

になります。
遺伝子変異を原因とするてんかんの場合、その原因である遺伝子型を特定できれば、迅速にどのようなてんかんなのかを診断でき、ひいてはいち早く最適な薬を選択することが可能となります。
今回開発しましたDNAチップを用いてSCN1A(ナトリウムイオンチャンネルの一種)に変異を持つ乳児重症ミオクロニーてんかん罹患した患者さんのDNAサンプルを解析した結果、比較的高い精度で遺伝子変異を判定できることが確認され、臨床応用可能な性能であることが示され、将来的にてんかん診断およびその薬物選択に役立てることができるのではないかと期待しております。
この賞を頂いたことを励みに、これからも地域医療発展のためさらに精進したいと存じます。この度は誠にありがとうございました。

ベッドサイド細胞診導入による細胞診断の精度向上と患者負担の軽減

病理部 刀稱龜代志, 小島啓子, 水木恵美子, 赤石友子, 熊谷直哉, 三上恵美子, 黒瀬 顕

○診療技術賞を受賞して
代表 病理部 刀稱龜代志
この度は、附属病院診療奨励賞診療技術賞を受賞させて頂き誠にありがとうございました。グループを代表して関係者の方々に心よりお礼申し上げます。
当病理部では2008年度より細胞診断部門を立ち上げ、検査件数も飛躍的に伸び続け、今年度は約7,300件、扱う標本枚数は15,000枚となります。結果報告までの時間も平均1.08日と全国どこの施設と比べても遜色のない実績を誇っています。
そのような中、乳腺・甲状腺領域における穿刺吸引細胞診の件数は増加しており、これらの細胞診断の精度を高めることと患者負担

の軽減を目的として、ベッドサイド細胞診を導入致しました。これは細胞診を専門とする細胞検査士が、外来など細胞採取現場におもむき、医師の補助を行うとともに採取された検体を迅速・適切に処理し標本作製をベッドサイドで行うものです。これにより細胞の採取状況など標本の状態を的確に判断してその場で医師に伝え、更なる穿刺が必要か終了可能かを判断します。導入前は、検体不適正標本が約14%程度存在しており、そのことが細胞診再検査へつながり、患者さんへの肉体的苦痛や不安、経済的負担を強いることになっておりました。導入後は、導入前より穿刺吸引細胞診の件数が2.5倍になったにもかかわらず、

検体不適正比率が0%となるなど大きな改善がみられ、患者さんに対する再検査もほぼなくなり、患者負担軽減に十分な効果がありました。また、細胞検査士が細胞診断をする際に超音波画像や患者さんの状態等の臨床情報を把握でき、臨床医とのコミュニケーションも円滑に取れるようになったことは数値化されない部分で診断精度向上に貢献していると考えます。
最後になりますが、この精度の高い細胞診断を今後益々発展させ、患者さんにとってさらに利益あるものにすべく、病理部職員一丸となって仕事に励んで参りたいと思います。今後ともご支援、ご指導のほど何卒よろしくお願い致します。

小児病棟における成長・発達を促す遊びの場の提供

第1病棟3階 松田和子, 成田牧子, 三上ゆみ子, 工藤晶子, 小友リカ, 佐々木香奈子, 一戸亜紀子, 尾崎浩美, 森田 章, 佐々木淑恵, 西村志津恵, 高田直美, 伊東美恵子, 船水信后, 渡邊梨沙, 花田幸子, 工藤和子, 工藤千晶, 齋藤真結子, 松本和可子, 長谷川琴美, 菅原美奈子, 工藤あゆみ, 佐藤 希, 中嶋江梨奈, 佐藤奈津美, 湊 幸恵, 菱谷美香, 平嶋清花, 竹浪美紀, 古川由季野, 佐藤みな, 犬亦江梨奈, 山口瑞恵, 鳴海佑美, 関 照美, 白戸順子

○心のふれあい賞を受賞して
代表 第1病棟3階 松田和子
この度、医学部附属病院診療奨励賞心のふれあい賞をいただきましたことは、誠に名誉なことであり、感謝申し上げます。推薦いただきました看護部長はじめ関係者の皆様にはスタッフ一同とともに心よりお礼申し上げます。
子どもは「遊び」を通して、身体機能が発達し、五感が磨かれ、社会性や倫理観を身に付けていきます。また、入院という非日常的な状態においては、遊びが子ども

の心を高揚させ、治療などから来るストレスを軽減することができます。小児科では治療の関係から入院が長期に及ぶことが多く、家族や友人、社会からの分離を余儀なくされます。そこで、子どもの成長・発達が滞滞することなく、入院生活が少しでも快適であるように、小児科病棟が開設されたときから遊びの場を提供してきました。この活動は、日常の看護活動の一つとしてスタッフが企画し、継続されてきました。小児科の医師や学生、院内学級の先生方の協力も得ながら、主に四季の行事を取り入れてきました。子どもたち

は準備の段階から心待ちにし、行事当日は日常には見られないパワーと笑顔を見せてくれます。2001年からは保育士が採用され、専門的立場から毎日充実した関わりができるようになりました。また、ボランティアを受け入れ、医療者以外の方々との関わりのお機会も増えてきています。
今回の受賞は、小児看護に携わってこられた諸先輩の方々の活動も併せて表彰されたものと思っております。これからも子ども達の療養環境が充実したものであるようにスタッフ一同取り組んでまいります。

ドトールコーヒーショップ優秀店舗賞総合部門堂々3位!

去る、2月17日(株)ドトールコーヒーが毎年主催する「優秀店舗賞」の表彰が東京で行われ、全国にある約1,100店舗のうち、総合部門において、「ドトールコーヒーショップ弘前大学医学部附属病院店」が、第3位の表彰を受けました。表彰は、「売店部門」「飲食部門」「総合部門」の3部門があり、総合部門については、ショップ全体の売上アップに加え、ドトールコーヒー本部が行うアンケート調査「お客様満足度」

において良好な成績を収めないため、利用されている職員・学生・患者さんのご協力によるものとスタッフ一同、心から感謝しております。
今年度は、オープン以来5年目になりますが、ドトールコーヒーショップを引き続きご愛顧下さいますようお願い申し上げます。

ドトールコーヒーショップ 弘前大学医学部附属病院店 店長 小田桐珠美



【編集後記】

向春の候、南塘だより第65号をお届けします。大雪に見舞われた平成23年度の冬も、終わりに近づきつつあります。この季節になると、3月11日のことを思い出します。普段当たり前前と思っていたことが、実は当たり前ではなかったことを思い知らされ、愕然としたさなか、知り合いの老人が「終戦直後は、仮設住宅も無ければ、食べ物も無かった。腐ったものを食べても下痢もしなかった」とつぶやいたのが印象的でした。第二次世界大戦と東日本大震災。二つの惨事の間には66年の年月があり、単純に比較はできないにせよ、物事の捉え方の多様性に驚きを感じました。被災地に赴き医療支援にあられた教職員の皆様、本当に頭の下がる思いです。東日本の復興を願いつつ、投稿して頂いた皆様に深謝申し上げます。(広報委員 佐々木賀広)